

トルであり、容積は霞ヶ浦の三十倍を越えている。従って、琵琶湖の汚染に対する自浄能力、つまり環境容量は、ケタ違いに大きいのである。現に琵琶湖の北湖の水はそのままでも飲料に適するとされているが、霞ヶ浦の水は消毒剤の使用量が話題になるほど多量に使用して飲料に供されている程である。当然、湖に生息する魚の種類も対照的に異っている。琵琶湖では冷水性の溪流に住むアユ、マスが中心であるが、霞ヶ浦では温水性の汚水に比較的強いフナ、コイが主である。つまり、霞ヶ浦は窒素やリン酸などの栄養分の多い富栄養湖で、地質学的な寿命からみれば老令なのである。

さて、その霞ヶ浦の水はどのように利用されているのだろうか。大ざっぱな年間利用状況は上水道用水に一千万トン、工業用水に九千九百万トン、農業用水に十億トンである。霞ヶ浦の流域は農業が盛んで、流域面積の四〇％が農耕地であり、その多くの部分が水田であるので、農業用水として用いられる水の量は非常に大きい。従って、ここで使われる肥料の量は、あとで述べるように膨大なもので霞ヶ浦の汚染の一原因となっている。

企業の立地数は四四一社で食料工業が盛んであるが、近年工業団地が各所に誘致されて以来、機械、金属、土石、より業がふえてきている。琵琶湖の企業立地数が、七〇〇社強であることと比較すると多すぎる数である。流域人口は五八万人、十二万七千世帯が集中している。水道給水人口はそのうちの四〇％である。これらの人々の生活の過程で排出される家庭下水、し尿の量は実に大きい。現在でも多すぎる程なのに将来ここに一三〇万人にも人口が集中することが見込まれているのであるから生活排水による霞ヶ浦汚染の問題は深刻である。

このように霞ヶ浦の流域でいとまれる農業、工業、都市などのさまざまな人の生活の過程で排出される各種の廃水が霞ヶ浦の環境容量に目もくれず、さながら霞ヶ浦を天然の大型浄化槽のようにつもりて流されているのである。これでは霞ヶ浦は汚染が進む一方であり、近い将来死の湖となるのではないかという心配は単なる杞憂ではないのである。

三、霞ヶ浦の汚染

去年の夏、玉造町、出島のイクスで養殖されているコ